

令和元年6月17日現在

機関番号：12601

研究種目：基盤研究(B) (一般)

研究期間：2016～2018

課題番号：16H03339

研究課題名(和文) 医療現象学の新たな構築

研究課題名(英文) Phenomenology of medical care: A new perspective

研究代表者

榊原 哲也 (Sakakibara, Tetsuya)

東京大学・大学院人文社会系研究科(文学部)・教授

研究者番号：20205727

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 12,600,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、これまで主として看護研究や看護実践の領域において注目されてきた、看護の営みについての現象学的研究(「ケアの現象学」)の、その考察対象を、医師による治療も含めた「医療」活動にまで広げることによって、「ケアの現象学」を「医療現象学」として新たに構築することを目的とするものであった。医療に関わる看護師、ソーシャルワーカー、患者、家族の経験とともに、とりわけ地域医療に従事する医師の経験の成り立ちのいくつかの側面を現象学的に明らかにすることができ、地域医療に関わる各々の当事者の視点を、できる限り患者と家族の生活世界的視点に向けて繋ぎ合せ総合する素地が形成された。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究において、医療ケアに関わる看護師、患者、家族等の経験とともに、地域医療に関わる医師の経験の成り立ちのいくつかの側面が現象学的に明らかにされ、地域医療に関わる各々の当事者の視点を、できる限り患者と家族の生活世界的視点に向けて繋ぎ合せ総合する地盤が整った。このことは、超高齢社会を迎えたわが国の喫緊の課題である「地域医療」「地域包括ケア」のシステム構築において、少なからぬ意義をもつと考えられる。

研究成果の概要(英文)：The aim of this research project was to found a "phenomenology of medical care" by expanding research issues and objects of the existing "phenomenology of nursing care" into the medical care in general, which also includes the doctors' medical treatment.

In this research project, some origins and formation of the experiences of the medical doctors who are engaged in community medicine as well as those of the nurses, social workers, patients, and their families are clarified from the phenomenological point of view. This means a new formation of the basic foundation on which various perspectives of the persons involved in community medicine (namely doctors, nurses, social workers, patients, and their families etc.) can be connected and synthesized in the direction of a lifeworld perspective of the patients and their families.

研究分野：哲学

キーワード：現象学 医療現象学 ケアの現象学 疾患と病い 生活世界 地域医療 医師の経験

## 1. 研究開始当初の背景

(1) 看護研究や看護実践の現場において、質的研究の一つの方法として「現象学的研究」が注目されるようになってすでに久しい。欧米では1970年代後半から現象学を用いた看護研究が試みられ、その後、英語圏や北欧で、ペナーなど、現象学をベースにしたいくつかの看護理論が構築された。またわが国でも1990年以降、現象学を用いた看護研究が顕著に増加し、『看護研究』誌において、現象学的看護研究の特集がしばしば組まれたり、単著として西村ユミによる現象学的視点からの一連の質的看護研究が公にされたり、さらに松葉祥一/西村ユミ共編の現象学的研究のすぐれた入門書が出版されたりした。

(2) わが国ではこうした動きに呼応して、現象学を専門とする哲学研究者の間でも、看護をめぐる現象学的な質的研究への関心が高まり、2011年秋に日本現象学会で「ケアの現象学」をめぐるシンポジウムが開催されたり、哲学思想系の雑誌『現代思想』で現象学の視点からの看護ケアの特集が2回にわたり組まれたりした。また現象学者・村上靖彦が実際に看護師にインタビューを行い、記述と分析を行った質的研究を公にし、看護研究者や看護師たちの間で大きな反響を呼んだ。こうした流れの中で、本研究代表者・榊原哲也も、現象学的看護研究の方法論や現象学的看護理論への寄与を目指した論文を国内外で公にするとともに、二つの科研費プロジェクト「基盤研究(B)「ケアの現象学の基礎と展開」(平成21~23年度)」と「基盤研究(B)「ケアの現象学の具体的展開と組織化」(平成24~26年度)」を研究代表者として遂行し、「ケアの現象学」の確立と展開に携わってきた。

(3) けれどもこれらの研究を遂行する中で新たな課題も浮かび上がってきた。それは、「ケアの現象学」を真に具体的に展開し、現場との組織化を進めるためには、診断・治療を行う医師とも連携する必要があるということであった。上記の研究遂行中、榊原は、医学的エビデンスに基づきつつも、できる限り患者や家族の視点に立って治療にあたらうとする何人もの医師に出会った。こうした医師たちの見方を現象学的に明らかにし、ケアの現象学に統合しなければならぬ。わが国は急激な高齢化の時代を迎え、医療の中心は病院から地域・在宅へと移行せざるを得ない状況にある。「地域包括ケア」のシステム構築が切に求められているわけだが、患者や家族に寄り添う地域・在宅医療を行うためには、看護、介護、福祉従事者のみならず、基幹病院や地域の医師も含め、医療者全体が患者や家族の生活世界に思いを致す現象学的視点を具える必要がある。その視点を哲学的に明らかにしてこそ、ケアの現象学は真に具体的に展開され組織化されると考えられた。以上が、本研究の学術的背景である。

## 2. 研究の目的

本研究は、看護を中心に介護・社会福祉など「ケア」に関わる領域において、注目を集めている「現象学的研究」の考察対象を、医師による治療も含めた「医療」活動という事象にまで拡大し、「ケアの現象学」を「医療現象学」として新たに構築することを目的とするものであった。当事者にとって世界がどのように経験されているかに着目する現象学という哲学の特質を生かし、医師の視点、看護師の視点、社会福祉士の視点、さらに患者の視点から「医療」という事象を明らかにし、それらを総合することで、今後求められる「地域包括ケア」、「在宅医療」に向けたより良い医療の実践を、哲学的に根拠づけるとともに、他方では、医療活動という事象そのものの方から既存の現象学を見直し更新することも試みた。

## 3. 研究の方法

(1) 本研究は、「医療」という事象の多様な側面を可能な限り視野に入れつつ、医療に関わる各々の当事者の視点から、記述を通じて現象学を立ち上げ、そこから方法論をも明確化しつつ「医療現象学」の新たな構築を図っていくために、できる限り多くの分野の一線で活躍する研究者を集めて共同研究を行う必要があった。そのため、現象学的哲学を専門とする研究者5名、医学研究者2名、看護学研究者4名、社会福祉研究者1名の計12名の研究体制を採った。

(2) 研究の方法としては、各々の研究者が現象学、医学、看護学、社会福祉学の各専門領域において行う個別研究を尊重しつつ、その研究内容を、共同研究会(「医療現象学」研究会)において検討しあい、擦り合わせ、総合していくという共同研究の方法を採用した。

(3) 個別研究では、医師、看護師、ソーシャルワーカー、患者へのインタビューおよび参与観察、そしてそれらから得られたデータの分析が研究の中心となったが、本研究ではとりわけ、地域医療を実践している医師たちへのインタビューとその分析に力を入れた。また、共同研究会に、現場の医師や患者を支援するNPO活動家、さらに医療ケアを研究する社会学者を招いて交流を行い、研究活動の具体化・充実化を図った。

## 4. 研究成果

(1) まず各研究メンバーの個別研究であるが、代表者・榊原哲也は、看護の実践・教育・研究における「現象学」の位置をまず明らかにし、現象学的研究の方法論に関する考察を行うとともに、計5名の医師へのインタビューを行い、地域・在宅医療に関わる医師の経験の成り立

ちを現象学的に明らかにした。また現象学および現象学的看護理論に関する研究成果の一部を、医療従事者向けの一般書として公にした。分担者・西村ユミは、家庭医へのインタビューと意識障害患者の家族との議論より、多様な立場にある人々の経験の連関を紐解く方法として、医療現象学を検討するとともに、地域および在宅医療に携わる医師および医療従事者の経験の聞き取りを通して、医療およびケアの成り立ちについて考察した。分担者・守田美奈子は、腎不全により腹膜透析導入に至った患者の経験について、60代男性の事例を分析し研究会で報告し、また透析療法を受ける家族へのインタビューデータの分析を行い、透析療法がもたらす家族にとっての病い経験と家族への支援について考察した。分担者・山本則子は、開発中の「ケアの意味を見つめる事例研究」の方法に関するワークショップと個別の事例研究を進めつつ、この方法の学術的要件を検討した。また看護職を中心とする実践家に向けて事例研究方法論の開発・普及を試みた。分担者・村上靖彦は、訪問看護師へのインタビューとフィールドワークや、専門看護師などへのインタビューを通じて、その分析の成果を『看護研究』誌における諸論文や単著として公表するとともに、虐待に関わる母親のグループプログラムにおいてもフィールドワークを行い、その研究成果も単著として公にした。分担者・野間俊一は、摂食障害患者の施設利用体験についての現象学的研究のために、異なる支援施設を利用している摂食障害患者4名に対して現象学的な視点からインタビューを行い、その結果を現象学的に分析するとともに、各々の社会資源の意義について考察した。分担者・孫大輔は、医療者と患者間の医療コミュニケーションをめぐる諸課題を探るべく、対話の実践と分析を進めるとともに、医療専門職の立場から現象学の視点を応用した地域住民との協働アクションプロジェクトを実践し、その成果を発表した。分担者・和田渡は、老人になるという経験がどのような経験であるのかを、特に病院で診察や治療を受ける場面の反省をもとに考察し、治療を受ける患者の立場に即して医療行為が患者にとってもつ意味を現象学的な観点から検討した。分担者・福田俊子は、ソーシャルワーカーの自己生成における変容の契機の構造を、現象学的な知見を用いて分析するとともに、地域医療におけるソーシャルワーカーの経験に関する調査を実施し、データ分析を進めた。分担者・西村高宏は、様々な医療現場において「哲学的対話実践」を行うとともに、「哲学プラクティス」という切り口からそれらの実践を批判的に検討した。また、被災地域などで医療者とともに進めている哲学的対話実践を継続して行い、その成果を国内の学会等で発表した。分担者・近田真美子は、ACT（包括型地域生活支援）で働く看護師へのインタビューを行い、その語りを現象学的手法で分析し、彼らの実践の構造を現象学的に明らかにした。分担者・小林道太郎は、看護師へのインタビューの分析から、ケアやコミュニケーションに含まれる現象学的要素を論じた。また、病棟看護師に対して行ったインタビューのデータ分析を進め、看護実践に含まれる構造を考察した。さらに現象学的研究の方法についても考察を行った。

(2) 共同研究は、各研究メンバーの個別研究を、メンバー全員が参加する共同研究会で検討する形をとり、3年間の研究期間に計11回の「医療現象学」研究会を東京大学、大阪大学、日本赤十字看護大学において開催した。また、患者を支援する活動家・山口育子氏（認定NPO法人COML）、地域医療に取り組む高山義浩医師（沖縄県立中部病院）、杉林稔氏（愛仁会高槻病院）、さらに医療社会学者・鷹田佳典氏を研究会に招いて、研究交流も行った。最終の第11回「医療現象学」研究会（2018年12月）はメンバー全員が登壇するシンポジウムの形で行われ、100名近い参加者があり、盛会となった。

なお、本研究の成果を一冊の書物にまとめて刊行すべく、現在、編集作業を行っている。

## 5. 主な発表論文等

### 〔雑誌論文〕(計67件)

榊原哲也、「安らぎ」としての健康、看護教育、査読無（依頼論文）60巻1号、2019、68-74

福田俊子、専門職が当事者になるとき——状況に巻き込まれるという臨床体験、日本運動器看護学会誌、査読無、14巻、2019、8-14

守田美奈子、川原由佳里、がん患者・家族へのケアとホリスティックナーシング、看護展望、査読無、43巻13号、2018、1249-1253

佐藤美雪、野口麻衣子、阿部智子、徳江幸代、山本則子、家族主導で在宅看取りの意思決定が進む中で訪問看護師が行った看取りまでの看護実践——慢性呼吸不全高齢者の在宅看取り事例を通して、日本在宅看護学会誌、査読有、7巻1号、225-233

村上靖彦、糖尿病の悲しいからだ 慢性疾患看護専門看護師米田昭子さん、看護研究、査読無（依頼論文）51巻7号、703-708

Yasuhiko Murakami, Phenomenological Analysis of a Japanese Professional Caregiver Specialized in Patients with Amyotrophic Lateral Sclerosis, Neuroethics, 査読有, 2018, 1-11

Son Daisuke, Mitsuyama Toshichika, Morimoto Yoichi, Mobile Stalls Pulled by Family Physicians: A Community-based Salutogenic Project Using Mobile Stalls, An Official Journal of the Japan Primary Care Association, 査読有, 41, 2018, 136-139

榊原哲也、死生のケアの現象学、清水哲郎／会田薫子編『医療・介護のための死生学入門』、査読無（依頼論文）2017、113-140

榊原哲也、記述するとはどういうことか 現象学の立場から、臨床精神病理、査読無（依

- 頼論文) 38 卷 1 号、2017、57-64
- 西村ユミ、クリティカルケアに関わる看護師の回復に向けて——現象学的視点からのアプローチ、日本クリティカルケア看護学会誌、査読無(依頼論文)、13 卷 1 号、2017、31-36
- 大竹 泰子、野口 麻衣子、野原 良江、山本 則子、最期の療養場所に関する意向の相違を抱えた家族に対する訪問看護師による意思決定支援、家族看護学研究、査読有、23 卷 1 号、2017、64-74
- Yasuhiko Murakami. La psychopathologie renversée en partant du soutien à domicile des schizophrènes graves dans le cadre de l'ACT, *Studia Philosophica Europeana*, 査読無、6(1-2), 2017, 212-241
- 孫大輔、医療者と患者のコミュニケーション: 対等な立場としての関係性を築く、在宅診療 100、査読無、2 卷 6 号、2017、490-495
- Wataru Wada, The Crisis of the Life-World and the Meaning of Life, Phenomenology and the Problem of Meaning in Human Life and History (Verlag Traugott Bautz GmbH), 査読有、2017, 131-141
- 榎原哲也、現象学的視点から見た透析患者への指導、日本透析医学会雑誌、査読無(依頼論文)、50 卷 3 号、2017、178-179
- 榎原哲也、新たな「ケアの現象学」、神戸看護学会誌、査読無(依頼論文)、1 卷 1 号、2017、11-23
- Ishikawa H, Son D, Eto M, Kitamura K, Kiuchi T., The information-giving skills of resident physicians: relationships with confidence and simulated patient satisfaction, *BMC Medical Education*, 査読有、17, 2017, 34-39
- 榎原哲也、看護と哲学——看護と現象学の相互関係についての一考察、看護研究、査読無(依頼論文)、49 卷 4 号、2016、258-266
- Tetsuya Sakakibara, Caring bei Husserl und Heidegger, *Phänomenologische Forschungen, Jahrgang 2015, Lebenswelt und Lebensform*, 査読無(依頼論文)、2016, 119-133
- 西村ユミ、患者への応答性としての看護実践、医学哲学・医学倫理、査読無、34 号、2016、69-74
- 21 西村ユミ、看護師の志向性ととも患者に出会う——フィールドワーカーの経験、現代思想、査読無(依頼論文)、2016、125-135
- 22 村上靖彦、変化の触媒としての支援者、臨床精神病理、査読無(依頼論文)、37 卷 3 号、2016、277-286
- 23 村上靖彦、「死ぬのに楽しい」: 訪問看護における看取りをめぐる現象学的な質的研究、Heidegger-Forum、査読無(依頼論文)、10 号、2016、104-126
- 24 野間俊一、死の精神病理学、現代思想、査読無(依頼論文)、44 卷、2016、82-93
- 25 小林道太郎、補い合うことと考えること: ある看護師へのインタビューの分析から、看護研究、査読無(依頼論文)、49 卷 4 号、2016、28-37

[学会発表](計 6 4 件)

- 榎原哲也、医療ケアの現象学——患者をトータルにみるとはどのようなことか、宇都宮大学異分野融合研究講演会「医療における「ケア」とは——医学と哲学から考える——」、2019
- 村上靖彦、看護師の ICU 経験から出発して看護を考える、集中治療医学会、2019
- 西村高宏、対話をとおして震災を 見る——医療現場における「哲学的対話実践」の試み、日本臨床倫理学会、2019
- 榎原哲也、疾患と病いの現象学——ある医師の語りから——、第 11 回「医療現象学」研究会・シンポジウム、2018
- Tetsuya Sakakibara, Nursing and philosophy: A study on the interrelationship between nursing and phenomenology, The 8<sup>th</sup> International Conference of PEACE (Phenomenology in East Asian Circle), Seoul, Korea, 2018
- 西村ユミ、ケアの実践とは何か?——看護と現象学との対話から、哲学会第 57 回研究発表大会「ワークショップ「ケアの哲学」」、2018
- 西村ユミ、医療と哲学をつなぐ現象学的研究、臨床ケア哲学・倫理学セミナー、2018
- Minako Morita, Survey on awareness of the need for advance care planning (ACP) among medical service providers in the chronic illness field in Japan: From the results of a questionnaire survey conducted with doctors and nurses dealing with healthcare provision for renal, cardiac and respiratory insufficiency, 22nd International Congress on palliative Care Conference, 2018
- Yamamoto-Mitani N, Noguchi-Watanabe M, Ikeda M, Ietaka H, and Sakakibara T. Case study research method to explore meaning of caring practice. Global congress of qualitative health research, 2018
- 野間俊一、「自覚的現象学」の臨床における有用性——摂食障害者へのインタビュー体験より、日本精神病理学会第 41 回大会、2018
- 孫大輔、不確実性に耐える: プライマリ・ケアにおけるダイアローグの可能性、第 9 回プライマリケア連合学会大会、2018

- 和田渡、老いることと医療 現象学的老人存在論の一面、第8回「医療現象学」研究会、2018
- 福田俊子、専門職が当事者になるとき 状況に巻き込まれるという臨床体験、日本運動器看護学会、2018
- 小林道太郎、現象学から実践へ、臨床実践の現象学会第4回大会、2018
- 榊原哲也、日本における現象学の動向 ケアと医療の現象学：向き合うことと寄り添うこと、心性現象学講壇第16期（中山大學、中国・広州）2018
- 榊原哲也、患者をトータルに見るとはどのようなことか 精神科看護への現象学からのアプローチ、日本精神科看護協会東京都支部 第9回東京精神科看護学術集会、2017
- 榊原哲也、現象学だからできること、臨床実践の現象学会第3回大会、2017
- 西村ユミ、看護ケアと現象学的研究、第22回日本糖尿病教育・看護学会学術集会、2017
- Yamamoto-Mitani N, Yamahana R, Yoshida S, Ikeda M, Murayama R, Saito N, Tsujimura M, Karasawa K, Takai Y, Takemura Y, Kamibeppu K, Noguchi-Watanabe M., Developing a Case Study Research Method Using Phenomenology and Grounded Theory: Elucidating Nursing Practice Knowledge, 14th International Congress of Qualitative Inquiry, 2017
- 村上靖彦、医療実践の現象学的分析、全国自治体病院協議会精神科特別部会、2017
- 21 近田真美子、支援の意味 重度の精神障がい者の地域生活を支える看護実践から（第5報）第5回「医療現象学」研究会、2017
- 22 Jojima H., Yamamoto-Mitani N., Noguchi-Watanabe M., Nursing Practice of the End-Of-Life Care for a Client with Dementia in a Residential Facility in Japan: A Case Study, East Asian Forum of Nursing Scholars (EAFONS), 2017
- 23 榊原哲也、新たな「ケアの現象学」、神戸看護学会第1回学術集会記念講演会、2016
- 24 榊原哲也、記述するとはどのようなことか 現象学の立場から、第39回日本精神病理学会、2016
- 25 榊原哲也、視点から見た透析患者への指導」、第61回日本透析医学会学術集会・総会、ワークショップ15「サステイナブルな患者指導を考える」、2016
- 26 西村ユミ、看護の現象を追究するということ—ケアの現象学、岩手看護学会学術集会、2016
- 27 西村ユミ、生活体験を明らかにする研究 現象学的看護研究からケアへ、第10回日本慢性看護学会学術集会、2016
- 28 守田美奈子、本庄恵子、田邊美乃、安島幹子、住谷ゆかり、加藤ひろみ、今井早良、宮副麗子、古川祐子、慢性腎不全患者・家族への外来支援における援助モデルの検討—外来での面談に焦点をあてて—、日本赤十字看護学会学術集会、2016
- 29 Yasuhiko Murakami, The Locked-in State as a Final Stage of Individuation: A Phenomenological and Qualitative Analysis of a Caregiver's Narrative, Personhood and the Locked-In Syndrome (Barcelona Autonomy University), 2016
- 30 村上靖彦、変化の触媒としての支援者、第39回日本精神病理学会、2016
- 31 村上靖彦、自由・願望・生命 現象学的な生命倫理学について、臨床実践の現象学会第2回大会、2016
- 32 野間俊一、摂食障害における自己愛の構造と精神療法、第39回日本精神病理学会、2016
- 33 Son D, Shimizu I, Ishikawa H, Aomatsu M, Leppink J, How does the conceptual structure of empathy of Japanese medical students change by communication skills training? Association for Medical Education in Europe (AMEE), Barcelona (Spain), 2016
- 34 小林道太郎、思いを大切にす ある教育担当看護師の語りから、第2回「医療現象学」研究会、2016

〔図書〕(計11件)

- 村上靖彦、医学書院、在宅無限大、2018、270
- 西村ユミ（編）、日本看護協会出版会、看護の体験を意味づける 対話をめぐる現象学、2018、191
- 榊原哲也、筑摩書房、医療ケアを問いなおす 患者をトータルにみることの現象学、2018、211
- 村上靖彦、講談社、母親の孤独から回復する、2017、144
- 西村ユミ、榊原哲也（編）、ナカニシヤ出版、ケアの実践とは何か 現象学からの質的研究アプローチ、2017、276
- 孫大輔、さくら舎、対話する医療：人間全体を診て癒すために、2017、240
- 村上靖彦、人文書院、仙人と妄想デートする 看護の現象学と自由の哲学、2016、241

様式 C-19、F-19-1、Z-19、CK-19 (共通)

6. 研究組織

(1) 研究分担者

研究分担者氏名：西村 ユミ

ローマ字氏名：(NISHIMURA, yumi)

所属研究機関名：首都大学東京

部局名：人間健康科学研究科

職名：教授

研究者番号 (8桁)：00257271

研究分担者氏名：守田 美奈子

ローマ字氏名：(MORITA, minako)

所属研究機関名：日本赤十字看護大学

部局名：看護学部

職名：教授

研究者番号 (8桁)：50288065

研究分担者氏名：山本 則子

ローマ字氏名：(YAMAMOTO, noriko)

所属研究機関名：東京大学

部局名：医学系研究科

職名：教授

研究者番号 (8桁)：90280924

研究分担者氏名：村上 靖彦

ローマ字氏名：(MURAKAMI, yasuhiko)

所属研究機関名：大阪大学

部局名：人間科学研究科

職名：教授

研究者番号 (8桁)：30328679

研究分担者氏名：野間 俊一

ローマ字氏名：(NOMA, shunichi)

所属研究機関名：京都大学

部局名：医学研究科

職名：講師

研究者番号 (8桁)：40314190

研究分担者氏名：孫 大輔

ローマ字氏名：(SON, daisuke)

所属研究機関名：東京大学

部局名：医学系研究科

職名：講師

研究者番号 (8桁)：40637039

研究分担者氏名：和田 渡

ローマ字氏名：(WADA, wataru)

所属研究機関名：立命館大学

部局名：文学部

職名：非常勤講師

研究者番号（8桁）：80210988

研究分担者氏名：福田 俊子

ローマ字氏名：(FUKUDA, toshiko)

所属研究機関名：聖隷クリストファー大学

部局名：社会福祉学部

職名：教授

研究者番号（8桁）：20257059

研究分担者氏名：西村 高宏

ローマ字氏名：(NISHIMURA, takahiro)

所属研究機関名：福井大学

部局名：学術研究院医学系部門

職名：准教授

研究者番号（8桁）：00423161

研究分担者氏名：近田 真美子

ローマ字氏名：(KONDA, mamiko)

所属研究機関名：福井医療大学

部局名：保健医療学部

職名：准教授

研究者番号（8桁）：00453283

研究分担者氏名：小林 道太郎

ローマ字氏名：(KOBAYASHI, michitaro)

所属研究機関名：大阪医科大学

部局名：看護学部

職名：准教授

研究者番号（8桁）：30541180

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。